

図書館だより

CONTENTS

図書館のちからプロジェクト イベントの意義について	1	図書館のちからプロジェクト (学生交流ツール)	4
図書館のちからプロジェクト(実施報告)	2	連載 書評	5
今村綾子監督のメッセージ	3	新規購入雑誌 / 寄贈図書案内 / 人事往来	6

始 動 !!

～ 図書館のちからプロジェクト ～

新 潟県立看護大学図書館では今年度、【図書館のちからプロジェクト】として、図書館の利用促進に取り組んでいます。今回はこの【図書館のちからプロジェクト】について紹介します。

私たちが【図書館のちからプロジェクト】として取り組むこととなった背景には、学生の図書館利用率の低さがあります。毎月の図書館利用者統計から捉えられる学生の利用状況として、3年生は演習や実習の時期における利用以外は少ないこと、4年生は看護研究や国家試験の自己学習のための場所として図書館を利用していることが伺えました。しかし、どの学年も利用状況としては少なく、なかでも1年生の利用が少ないといったことが課題として取り上げられました。

本学図書館は、看護大学における図書館として、看護や疾患にかかわる書籍のほか、患者理解につながる闘病記を多く揃えています。このため、演習や実習、国家試験の自己学習の場として図書館を活用していただき、様々な図書に触れ合ってもらいたいと願っています。また、患者さんやその家族による闘病記や看護師による看護体験は、看護職としての基礎作りともなります。このため低学年から利用してもらいたいと思っています。

大学図書館は、「大学における学生の学習や大学が行う高等教育及び学術研究活動全般を支える重要な学術情報基盤の役割を有しており、大学の教育研究にとって不可欠な中核を成し、総合的な機能を担う機関の一つで

ある。」(文部科学省「大学図書館の基本的機能」より抜粋)とあるように、本学図書館においても資料収集などにより学生の学習に大きく貢献するものです。このため、利用者が少ないという課題解決にむけ、利用者を受け入れるだけでなく、積極的に学生に働きかけていくことで、学生の興味・関心を引き起こすことを本企画の目的として掲げました。【図書館のちからプロジェクト】イベントによる書籍や視聴覚教材との出会いが、対象(患者)理解という側面から、学生が看護師として社会に出るための基礎作りに貢献してくれることを願っています。

図書館のちからプロジェクトメンバー



メンバー5名：後列左から山田委員・石原委員・吉原司書
前列左から野口委員・高塚委員



図書館のちからプロジェクト 第1回・第2回 実施報告

今年度、【図書館のちからプロジェクト】では初めての試みとして、平成27年4月15日(水)と5月13日(水)の2回、12時10分から図書館雑誌閲覧コーナーにて新入生歓迎イベントを開催しました。参加者は、第1回開催では新入生2名、第2回開催では新入生3名の参加がありました。イベントの内容は、図書館に所蔵している本の紹介を中心に行いました。

担 当した高塚委員は、秋本典子氏の著書『看護の約束 命を守り、暮らしを支える』を紹介しました。この本は看護師、看護学生、そして看護教員の誰でもが手にとり読むことで、「看護とは何か」を考える機会を与えてくれるものです。さらに、「看護は社会に何を約束するのか」という問いとその答えが書かれています。この切り口から看護をそして看護師を捉えたこの本は、見事に患者という立場と、患者にかかわる看護師の看護行為の意味を浮き彫りにしてくれています。まだ臨床現場を知らない看護学生にとっては、何のことだかわからないかもしれません。しかし、基礎実習、領域別実習と進むにつれ、著者が何を伝えようとしてい

るのか感じとることになるでしょう。看護に携わり生きていく看護者にとり、自分の看護行為を振り返る一冊を自分のすぐ隣に置いておくことは、自分のゆく道を示してくれ、看護師としての自分に勇気を与えてくれることになることに違いない。この一冊はそんな本といえます。

＜紹介された書籍＞

『看護の約束 命を守り、暮らしを支える』
(請求記号:N112-A35)
(1階 棚1右側)



ま た、山田委員は、平成25年度まで重点図書として蔵書を増やしていた「闘病記」のジャンルから、ダウン症候群の子ども本人や、その家族が執筆された本を3冊紹介しました。ダウン症候群は21番目の染色体が3本組になっている染色体異常の疾患です。『愛にはじまる』や『ぼくはダウン症の俳優になりたい』は、わが子がダウン症候群と診断された日のことから、ちょっとした1日の出来事など、母親の率直な気持ちが綴られています。また『21番目のやさしさに』の著書である岩元 綾さんは、ダウン症候群ではじめて4年生大学を卒業した方です。ちょうどこのプロジェクトで、どの本を紹介

するか考えていた時、3月21日“世界ダウン症の日”が近かったため、ダウン症候群についての本を紹介しました。

＜紹介された書籍＞

『愛にはじまる』
(請求記号:N049.5-ダウン症候群)
(1階 棚1左側)

『ぼくはダウン症の俳優になりたい』
(請求記号:N049.5-ダウン症候群)
(1階 棚1左側)

『21番目のやさしさに』
(請求記号:N049.5-ダウン症候群)
(1階 棚1左側)



石 原委員は、図書館で気分転換したい時に、一般雑誌を手にとってみることを提案しました。1回目に参加した学生は、県外出身者だったこと、初めての一人暮らしだったことから、地元を紹介している雑誌や家事についての内容が掲載されている**Komachi**や**キャレル**、**オレ**

ンジページなどの雑誌紹介は、ニーズに適合していたようでした。図書館には、手に取ることに躊躇する難しい本もありますが、このように気軽に楽しめる一般雑誌もあります。友達を待つ間や、授業と授業の間のなどに、ぜひ図書館を活用してください。

第2回開催は、第1回に紹介した書籍に加え、それぞれの担当委員が、看護に興味をもつきっかけとなった書籍、看護学生時代に感激した書籍を紹介しました。学生は、その話に興味をもって参加していました。参加者は少なかったですが、紹介した本に興味を持ち、紹介図書の貸し出しにつながったことから、図書館で有意義な時間を過ごしていただけたと思っています。



【第1回目の様子】



【第2回目の様子】

図書館のちからプロジェクト 第3回 実施報告



第3回目は、ドキュメンタリー『音のない3.11被災地にろう者もいた』の上映会を行いました。このドキュメンタリーを見て、他者を知ること、理解すること、今、できることなどを、考えてみるきっかけになればと思い企画しました。

第3回目の上映会は、新入生だけではなく、2年生や3年生、手話サークルなどへ宣伝し、参加者は10名でした。参加した学生は、「まわりに目を向けたり関心をもつことの大切さを改めて考えさせられた」や「他者に関心をもつことで、何が困っているのか察することができるのではないかと思った」、「この映画を見たことのない人に薦めたい」などの感想がありました。

図書館内でのDVD上映会は、初めての試みでした。今後も、こういった視聴覚教材を取り入れながら、人として視野を広げる、看護師として他者を理解するなどのきっかけとなる活動をしていきたいと考えています。



今村監督が皆さんへメッセージを寄せてくれました



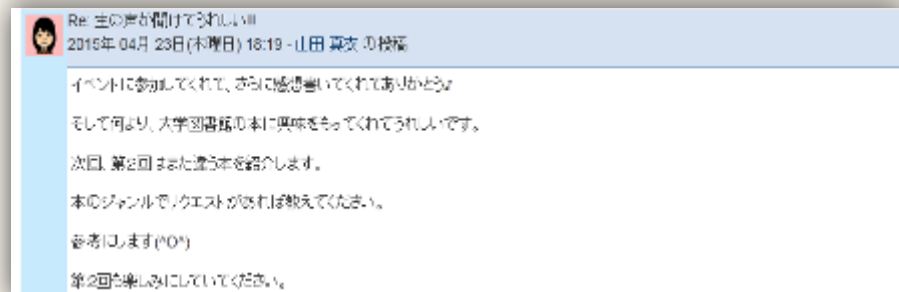
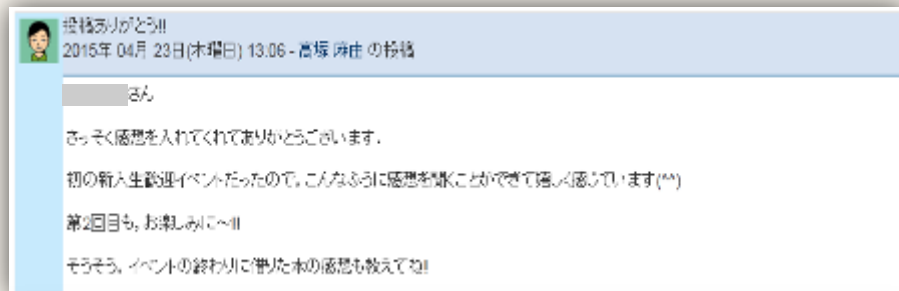
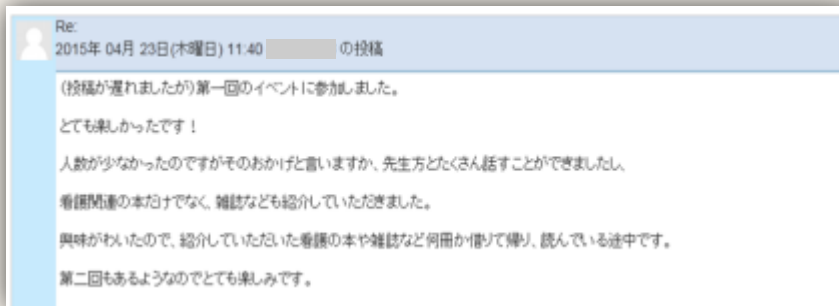
➤ んにちは。映画監督の今村彩子です。
 〽 私は耳が聞こえない難聴です。
 東日本大震災では、津波警報が聞こえず亡くなった耳の聞こえない人もいました。
 聞こえる人と聞こえない人の日常における交流がもっとあれば、助かったかもしれません。聞こえる人には「ろう・難聴者」の存在を知っていただけたらと思います。
 ろう・難聴者は、津波警報や避難所での放送など情報を得ることができれば、高齢者を助けたり、物資を配ったりするなど支援活動にあたることもできます。
 聞こえる人ができなくて、聞こえない人ができることは何か、自分ができることは何かを考えていきたいと思っています。
 そして、東日本大震災で亡くなった方々へのご冥福を祈るとともに、聞こえる人、聞こえない人たちがお互いに歩み寄り、共に生きることができる社会にしていきたいと思っています。よろしくお祈りします。



図書館のちからプロジェクトでの学生交流について

このプロジェクトは、お昼休みを活用して実施しています。そのため、学生がどのように感じたのか、実際に意見を聞く時間がありません。このプロジェクトでは、参加学生の感想を次のイベントに活かしていく「参加型イベント」にしていきたいと考えています。そこで、【図書館のちからプロジェクト】の担当者と参加学生のコミュニケーションツールとして、インターネットを利用した意見交換の場を作成しました。

新入生の感想からは「教室から図書館は遠い」との声が聴かれました。学生にとって図書館が身近なものになるために、学生との意見交換が活発となることを願っています。



また、感想を「面白かった」「どちらかといえば面白かった」「どちらかといえば面白くなかった」「面白くなかった」「とくにありません」の中から投票してもらうこともでき、より迅速に意見を集約できる場となっています。今回、【図書館のちからプロジェクト】では、3回イベントを開催しましたが、投票してくれたすべての学生からは「面白かった」と、感想をいただきました。この結果を受けて私たちは今後も、「面白かった」と言ってもらえるような企画を提案してゆきたいと改めて思いました。学生の皆さんの声が直接聞けることで、私たち自身も励みになっています。どうぞ忌憚のないご意見をお聞かせください。

このフォームの入り方は、図書館ホームページ>図書館のちからプロジェクトをご覧ください。みなさん、意見交換の場に参加してぜひご意見をください。お待ちしております。



図書館のちからプロジェクトURL <http://lib.niigata-cn.ac.jp/chikara.html>

図書館ホームページより

連載 書評

『認知症になった私が伝えたいこと』

佐藤雅彦 著, 大月書店, 2014年



老年看護学 助教 安藤 亮

テレビや新聞などで認知症の事が盛んに取り上げられている昨今、多かれ少なかれ認知症に対して興味を持っている方は多いのではないのでしょうか。今回ご紹介するのは、51歳の時にアルツハイマー型認知症の診断を受けた当事者である著者が、これまで歩んできた日々と今の生活について、認知症となった当事者の声を届けることについて、そして認知症と生きる著者からのメッセージについて記されているノンフィクションの書籍です。

「はじめに」の部分にこんな一節があります。「できる、できないだけで人間を語ることはできません。自分が自分であることは、何によっても失われることはありません。」著者も述べているように、ここに書いてあることがすべてのアルツハイマー病の方に当てはまるとは思いません。しかし、私はこのようなことを理解したうえで認知症の方と関わっていく、支援をしていく必要があるとこの一節から改めて感じました。

本当はもっとできることがあると頭の中では分かっているつもりでも、ふと気づくと認知症であるという偏見のフィルターを通してその方をみていることはよくあることです。そして、支援をする側がその方の限界を決めてしまうことも往々にしてあるのではないかと思います。若くして認知症となった著者は、もともとシステムエンジニアということもあり、ipadやパソコンを駆使してグーグルカレンダーによる予定管理をしたり、日記もパソコンでつけているそうです。この頃は老若男女を問わず、タブレットやスマートフォンを使う姿を見かけます。記憶力の低下をIT機器により補うことができる可能性は学会などでも注目されています。誰もがタブレットを使いこなせる訳ではないかもしれませんが、認知症の方を支援する側も時代の流れに沿って固定概念にとらわれず、利用できるものは利用し、その方の自立を目指した支援が求められるのではないかと思います。

また、「認知症になると、たしかに不便ですが、けっして不幸ではありません。自分がどのように生きていくかは、自分で決めて、自分でつくることができるのです。」と佐藤氏は断言しています。このような考えに至るまでには様々な紆余曲折があったと推察され、実際に著者も会社を退職してからは「これからどうしたらいいのか・・・」と将来が見えず不安に陥って落ち込んでしまった、日常生活における些細なつまずき(人の名前が出てこない、夕食の弁当を買ったのに、忘れてまた材料を買いに行ってしまうなど)により自分をコント



請求記号:N049.4-アルツハイマー型認知症
(1階 棚1左側)

ロールできるという自信が消え失せていきそうだった、と述べています。そんな最悪な状態の中で旧約聖書の中にある言葉から自分自身を取り戻し、様々な支援団体の人たちと関わる中で前向きに生きようと思いはじめます。

第2章では自分でつくる自分の生活、というテーマで現在一人暮らしをしている著者の日常生活での困りごとと、それに対して著者が実際に行っている工夫について書かれています。一部を紹介すると、同じ物を買わないように「買ってはいけないものリスト」を用意する、電話だと内容を忘れてしまうので約束はメールで取り合う、などです。必ずしもすべての認知症の方に可能なことではないとは思いますが、それでも読んでいてなるほど、と思える工夫がいくつもありました。

そして第4章では認知症である本人、家族、医師や看護師などの医療関係者、地域の方、行政、すべての人々への著者からのメッセージが述べられています。

「おわりに」の中で著者は再度、人は、何かが出来なくても、それ自体が尊いものである、そして自分も失敗を恐れず、無限の可能性を信じてこれからも生きていく、という言葉で締めくくられています。認知症に関しては現実的な問題が多々あると思いますが、認知症となった当事者がどのような軌跡をたどり、そしてどのようなことを望んでいるのかについて、私たちに貴重な示唆を与えてくれる1冊であると思います。

平成27年新規購読雑誌について

【学術雑誌】

INFECTION CONTROL
JJNスペシャル
Nutrition Care
WOC Nursing
おはよう21
女たちの21世紀
コミュニティケア
社会と調査
消化器外科Nursing
助産師
整形外科看護
生命倫理
透析ケア
糖尿病ケア
日経サイエンス
日本在宅ケア学会誌
日本小児看護学会誌
日本地域看護学会誌
日本認知症ケア学会誌

日本保健医療行動科学会雑誌
日本リハビリテーション看護学
会学術大会抄録集
認知症ケア事例ジャーナル
認知症の最新医療
泌尿器ケア
プロフェッショナルがんナーシング
保健師・看護師の結核展望
リハビリナース
臨床助産ケア
老年看護学
老年社会科学
老年精神医学雑誌

【中止雑誌】

・Health Care for Women International
・International Journal of Nursing Studies
・International Nursing Review
など 全18タイトル
※他の中止雑誌に関しては
図書館ホームページ > 購読雑誌一覧
をご覧ください。
<http://lib.niigata-cn.ac.jp>

【一般雑誌】

National Geographic
キャレル

一般雑誌とはタウン誌・ファッション誌
などです。保存期間は1年です。

皆さまのご利用お待ちしております。

寄贈図書案内 平成26年12月～平成27年5月受入

	寄贈者(敬称略)	書名	出版	請求記号
学 外	若林 広行	わかりやすい疾患と処方薬の解説2014 病態・薬物治療編	2014	492.3W25-14
	山本 達男	病原体と感染症 第2版 総論編 Battle & medical applica- tion 講義シリーズ	2014	493.8-Y31-1

※受入順に記載しています。

寄贈いただきありがとうございました。

人事往来 ～図書委員と図書館職員ごあいさつ～

新図書委員(H27.4～) 助教 野口 裕子

図書館は知の宝庫です。1人でも多くの方に図書館を利用していただき、素敵な書物と出合えるきっかけを提供できればと考えております。書物を通して自らの知的好奇心を大きくふくらませてください。

新採用図書館職員 非常勤職員 柳澤 和代

3月末よりお世話になっております。たくさんの方に囲まれて、毎日楽しくお仕事をさせていただいております。利用者の皆さまのお役に立てるよう、努めて参りますのでよろしくお願い致します。

退職図書館職員 前非常勤職員 清水 志緒理

私は、看護大学の図書館に5年間お世話になりました。医療分野の資料を扱うのははじめての事で戸惑うこともありましたが、利用者の方々より数多くの事を学ばせて頂き、大変充実した日々を過ごさせて頂きました。今後も看護大学の皆様のさらなるご活躍をお祈りしています。